

# Newsletter

2009 March No. 7



Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

## 学術研究の社会的使命

文学研究科委員長 中川純男



星を観察していて井戸に落ちたタレスが、陽気なトラキア娘に、「天上のことは熱心に知ろうとするのに、足下のことは気がつかない」とからかわれたという話がある。プラトンの『テアイテトス』に紹介されている。タレスを最初の哲学者と呼ぶのはプラトンの弟子アリストテレスであるが、プラトンもこの逸話を哲学者一般に向けられた非難であるといっているから、タレスに哲学者の典型を見ていることになる。ここでいう哲学者とは知を愛しているひとという意味である。プラトンの念頭にあったのは、この逸話が書かれるより何年も前、まだ若かったときにその生と死をつぶさに経験したソクラテスの姿であろう。真実を求めて止まないソクラテスは、そのことゆえにアテナイで死を命じられた。

一見、趣の異なる話がアリストテレスの『政治学』に伝えられている。タレスの貧しさを見て、哲学は役に立たないと笑った友人に、天文学の知識からオリーブの豊作を予見したタレスはミレトス周辺の搾油器を冬のうちに安く契約し使用权を独占した。秋にひとびとが搾油器をもとめて殺到したとき思いのままの対価で貸しつけ巨額の富を手に入れたというのである。哲学者にとって、財をなすことはその気になれば容易である。ただそのようなことに熱心でないだけだ、とアリストテレスは結んでいる。アリストテレスのいう哲学とはものごとの原因を知ることである。哲学という訳語より学問のほうがよいかもしれない。ものごとの原因を探求する学問が役に立たないはずはない、学問するひとの無力は見かけにすぎないとアリストテレスは考えたのであろう。

それぞれの時代や地域で、解決を求められている問題がある。解決のためにさまざまな知識が動員される。そのとき必要な知識を体系的に提供するのも大学の社会的使命のひとつである。しかし、問題を見いだすのは人間である。何を問題と感ずるのか、問題の解決をどこに求めるのか。健全な感性と理性を養うのもまた学問である。一見、実利から遠いと見える基礎研究がそれにもかかわらず社会や歴史を根底から変えるほどのおおきな力をもつのは、問題を感じ見いだす力を養うからにはほかならない。「論理と感性の先端的教育研究拠点」における研究蓄積が、年長のタレスに導かれ、やがて多くの若いタレスたちがここから巣立ってゆくことを確信し楽しみにしている。

## Contents

学術研究の社会的使命	1
慶應義塾大学グローバル COE 3 拠点シンポジウム	2
国際シンポジウム 「医療人類学の最前線 I・II」報告	3
信濃町キャンパスリサーチパーク内 マーモセット飼育実験施設の紹介	4
活動報告	5
事務局だより	7
研究員紹介	8

# 慶應義塾大学グローバル COE 3 拠点シンポジウム

(2008年11月28日、三田キャンパス北館ホール)

現在、慶應義塾大学にはいくつかのグローバル COE 拠点が発足しているが、共通の関心とテーマを持つ、「論理と感性の先端的教育研究拠点」(社会学研究科)、「幹細胞医学のための教育研究拠点」(医学研究科)、「環境共生・安全システムデザインの先端拠点」(システムデザイン・マネジメント研究科)が社会学研究科特別招聘教授として来日した Michel Hofman 教授を囲んでのシンポジウムを11月28日に三田北館ホールで共催した。なお、このシンポジウムはすべて英語で運営された。

「論理と感性の先端的教育研究拠点」渡辺拠点リーダーによる Opening remark の後、M. Hofman 教授が“Human Brain Evolution: From Matter to Mind” というタイトルで講演を行った。ヒトの脳進化の特徴を概説し、とくに大脳灰白質よりも白質部分の増大が著しいことを述べ、情報処理の観点からの進化の特徴を述べた。さらに脳進化を促した要因として環境要因、社会的要因を取り上げて人間の知性がどのように進化したかを説明した。さらにヒトの脳の量的進化は文化的進化のはるか以前に停滞しており、道具使用や文化と脳の関係についても洞察を述べた。

ついで、医学研究科から北村研究員(総合医科学研究センター)が“Therapeutic strategy for spinal cord injury using hepatocyte growth factor; from rodent to primate” という講演を行った。これは hepatocyte growth factor を脊髄損傷部位にウイルスを使って導入し、損傷部位のファイバーや血管が部分的に修復され、行動評価スコアも上がったことを述べたもので、トランスレーショナル・サイエンスの成果である。また、同じ医学研究科の藤吉研究員(総合医科学研究センター)が“Analysis of the spinal cord injury using diffusion MR imaging?: from DTT to q-space imaging ?” という講演を行い、マーモセットで、標準化した手続きで脊髄損傷を作り出し、最新の拡散テンソルを用いて損傷部位、治癒過程を生体で可視化するという話を美しい画像とともに説明し、次世代イメージングの展望を述べた。

昼食をはさんで午後からは早稲田大学国際教養学術院の内田教授が“Evolution of the brain and human way of life” というタイトルで講演し、生物人類学の立場からヒトの脳とヒトとしての行動の関係を論じた。ついで社会学研究科の伊澤准教授が“Human brains and avian brains” として、ヒトの脳進化とは異なる進化を遂げた鳥類の脳進化を概説し、特に鳥類の中で大型脳を持つカラスについて、グローバル COE での新しい成果を含めてその構造と機能を説明した。

最後は本拠点の国内連携拠点である理化学研究所脳神経総合研究センターの入来博士が“Neurobiology of Primates' Intellectual Evolution” という講演を行った。この講演では理化学研究所でのサル道具使用の豊富なデータを紹介し、効果器の延長としての

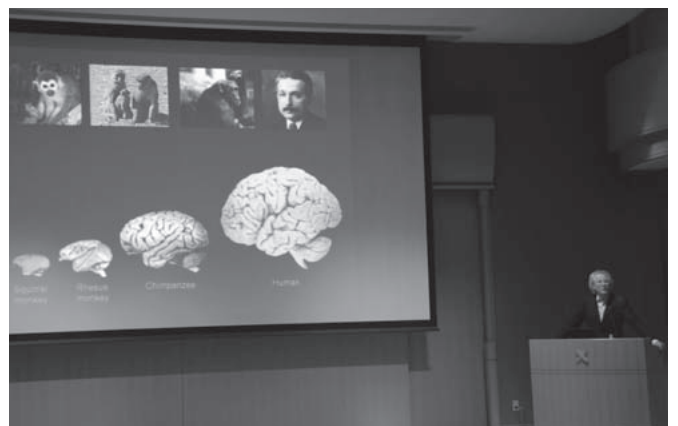
道具のみならず、感覚器の延長としての道具使用を紹介し、道具使用と自己意識さらには言語の進化にいたる壮大な俯瞰を行った。

これらの講演の後、システムデザイン・マネジメント研究科の前野教授の司会で全体討論が行われた。前野教授は我が国におけるロボテックスの第一人者であるばかりでなく、意識についてもユニークな議論を展開していることでもよく知られており、この全体討論でも意識を中心とする議論が活発に行われた。

シンポジウム終了後、東館交流スペースで懇親会が行われたが、オランダ出身である Hofman 教授は壁に掛けられた咸臨丸の設計図にいち早く注目し、造船場所(Kinderdijk)がどこにあるかを説明し、また後日その場所の写真(掲載図版〔上])を送ってきてくれた。

今後とも、このような学内での研究科を超えた交流を深め、総合大学としての利点を生かした研究を展開していきたい。

(渡辺 茂)



# 国際シンポジウム「医療人類学の最前線 I・II」報告

(2009年1月10日〔三田キャンパス東館 8F〕、23日〔三田キャンパス東館 GSEC-Lab〕)

2009年1月に、文化人類学グループでは「医療人類学の最前線 I・II」と題して三田で二回シンポジウムを行った。医療・社会科学の幅広い分野からの研究者が集まり、両日とも90名を超える参加者数を記録し、ディスカッションの時間も足りない程の盛り上がりを見せた。

19世紀の進化論や遺伝学の登場が、人間理解の根本的な変革をもたらしたように、一世紀以上を経て新たに台頭してきた遺伝子の言説は、人々の自己意識を大きく変化させる可能性を秘めている。ゲノム計画や遺伝子診断を通じて、私たちは今まで手にすることのできなかった自らの運命についての「神託」を受ける日が近いともいわれる。しかしその潜在的影響力にもかかわらず、専門家と一般の人々の理解の間には大きな隔りがある。現時点での遺伝の知識・技術の不確実性は専門家には認識されているものの、単純化された言説が一般に流布することで、臨床現場で混乱が生じることも少なくない。このような問題意識から、McGill大学・医療社会研究・人類学部のMargaret Lock教授をお招きして、先端医療技術が新たにもたらす希望と不安の両面についてお話いただいた。両日の講演とも、体系化・組織化されないが故に沈黙させられやすい、一般の人々の声はどう耳を傾けていくことができるのか、人類学的探究の将来の方向性を考えさせられる内容であった。

ロック先生は、北米における医療人類学の第一人者であり、日本でも『脳死と臓器移植の医療人類学』、『更年期：日本女性が語るローカル・バイオロジー』、『都市文化と東洋医学』等を通じて広く知られている。第一回目のシンポジウム「遺伝、神託、バイオテクノロジー」(10日、東館8階)では、先生に遺伝研究、特にアルツハイマー病に関しての人類学的分析をご報告いただき、それに対して生命倫理の立場から東京大学の米本昌平先生に「科学革命としてのヒトゲノム計画」と日本の

状況を、同大学人類学のMohacs Gergely氏に糖尿病の人類学的調査についてご発表いただいた。また、科学史の観点から立命館大学の松原洋子先生、行動遺伝学の立場から慶大の安藤寿康先生、そして同大の宮坂敬造先生のコメントがあった。

第二回目の「国家、感染、バイオポリティクス」(1月23日、GSEC-Lab)では、ロック先生は「新優生学」の名で一般に語られている現象に触れ、その複雑さを理解するためには、旧来型の国家からのトップダウンの権力だけでなく、慣習や文化に彩られたボトムアップの人々の欲望や、社会的不平等の構造を分析する必要を指摘された。この日の第二部では、グローバル化する医療テクノロジーが、国境を越えて脅威をもたらす感染症に対してどのような攻防を可能にしているのか、またそこでどのような矛盾が生じているのか、異なる分野の研究者から報告があった。京都大学脳生理学の美馬達哉先生には感染症をめぐるリスク・パニックについて、慶大の鈴木晃仁先生には医学史の立場から日本における近代化と感染症について、また東京大学の香西豊子氏には幕末日本における「感染」概念について、MIT・医療政治学のPeter Doshi氏には、感染症をめぐる疫学言説とリスク概念についてご講演いただいた。

遺伝病と感染症をめぐる言説には、その脅威の性質、ステイグマの有無、攻防の主体といった点で極めて対照的な特徴がみられる。このような相違点に留意しつつ、日独における遺伝学の成立について東京大学・医療社会学の市野川容孝先生にご講演いただき、総括として宮坂先生にコメントをいただいた。活発な議論となり、領域を超えて意見を交換することの面白さを確認できる実り多い会となった。司会は両日とも慶大・医療人類学の北中淳子が担当。

(北中淳子)



# 信濃町キャンパスリサーチパーク内 マーモセット飼育実験施設の紹介

脳と進化班では、慶應義塾大学医学部信濃町キャンパス内にある総合医科学研究棟内に、マーモセットの飼育および実験施設を立ち上げました。

## ●マーモセットとは

私たちが実験対象とするマーモセットは、コモンマーモセット (*Callithrix jacchus*) という種で、霊長目・マーモセット科に属し、南米ブラジルを原産とする新世界ザルの仲間です。成体の体重は 300 g 前後、尾が長く、耳の周りに白くてふさふさとした長い毛を有するのが特徴です。

## ●飼育・実験環境

飼育・実験施設は、信濃町キャンパス内の総合医科学研究棟にあります。この研究棟の一部はリサーチパークと呼ばれ、独立の研究プロジェクトを推進する研究室が集まっています。私たちのような、人文系の研究プロジェクトが参加するのは初めてということです。

私たちマーモセット研究従事者は、動物を導入する前に、飼育管理方法について、30年に渡りマーモセットの飼育繁殖を行ってきた実験動物中央研究所において研修を受けて参りました。また、立ち上げに際し、マーモセットをすでに導入しているケンブリッジ大学など、いくつかの研究室を見学させていただき、飼育や実験についての経験的知識を学んできました。そして、昨年7月から、オスメス2頭ずつ、計4頭のマーモセットの飼育を始めました。

## ●マーモセット研究の背景

マーモセットを実験研究に用いる最大の利点は、ヒトと同じ霊長類の動物であるということです。ヒトへの応用を目的とした医学研究では、ヒトと近縁の種を用いなければ意味をなさない研究テーマも少なくありません。また、認知機能とその神経基盤を探る際にも、ヒトとの直接的な比較が可能となります。

また、霊長類モデルとしてこれまで多く用いられてきたマカク属のサル(ニホンザルやアカゲザル)に比べ、マーモセットは飼育しやすく、繁殖効率にも優れています。そのため、近年では医学、神経科学研究を中心とし、マーモセットを用いた研究の人气が高まっています。

## ●人文グローバル COE でのマーモセット研究

マーモセットを用いた医学的研究がかなりのスピードで進んでいる一方で、その認知能力についての実験的研究は比較的少ないといえます。マーモセットは社会性の高い動物であり、表情、発声、嗅覚刺激によって他個体とのコミュニケーションをはかっています。このようなコミュニケーションを支える認知機能がどのようなものなのか調べることは、私たちヒトのコミュニケーション、とりわけ、言語や、言語を支える認知機能の解明につながると考えられます。

私たちは、マーモセットのこれらの特徴を生かして、実験心理学的・神経科学的・分子生物学的な手法を用いた実験を進めていく予定です。そのために、飼育施設を拡充し、マーモセットの家族内、家族間でどのようなコミュニケーションを行っているのかについても、解析を行う計画です。これらの試みは“Project NEXT”と名付けられています。将来的には、遺伝子工学と行動工学を組み合わせることにより、マーモセットも言語を話すことができるようになるかもしれません。

今後、医学部生理学教室(岡野栄之教授)、(独)理化学研究所象徴概念発達研究チーム(入来篤史グループディレクター)、同生物言語研究チーム(岡ノ谷一夫チームリーダー)、放射線医学総合研究所(大林茂チームリーダー)、実験動物中央研究所と連携し、各分野での最先端の技術を用いながら、論理と感性の進化的起源に迫る研究成果を報告していきたいと思っております。(山崎由美子)



## 活動報告

開催日	研究・運営プログラム名	会議等の名称
1月5日	脳と進化班	講演会 “Contributions of bodily state to emotion: evidence from neuroimaging”
1月10日	哲学・文化人類学班	「医療人類学の最前線 I: 遺伝、神託、バイオテクノロジー」
1月11日	全体 (共催: 心が活きる教育のための国際的拠点 (京都大学))	第2回京都大学・慶應義塾大学 COE 合同シンポジウム 「心・病・文化—医療をめぐる文化と倫理」 於: 京都大学時計台記念館 国際交流ホール I
1月23日	哲学・文化人類学班	「医療人類学ワークショップ」(午前)、 「医療人類学の最前線 II: 国家、感染、バイオポリティクス」(午後)
1月30日	全体	3施設キックオフシンポジウム
2月2日	全体	プロジェクト科目報告会
2月3日	倫理委員会	倫理委員会
2月8-9日	全体	“Emotional animals, Sensible humans”
2月10日	全体	平成 20 年度若手研究成果報告会
2月25日	哲学・文化人類学班	「<文化と医療>再考—人類学と文化精神医学の相互関与性の現在」
3月2、4日	哲学・文化人類学班	“Philosophical Lectures by Prof. Friedemann Buddensiek” (University of Frankfurt)
3月12-16日	言語と認知	“Uvic-Keio Joint Seminar on Cognitive Psychology”

### 講演会 “Contributions of bodily state to emotion: evidence from neuroimaging” (1月5日開催)

去る1月5日、三田キャンパス南館において、人文グローバル COE 主催の講演会が開催された。今回ゲストに招いたのは、Hugo Critchley 教授 (University of Sussex, Brighton and Sussex Medical School) であり、“Contributions of bodily state to emotion: Evidence from neuroimaging” というタイトルでの講演であった。Critchley 教授は、認知神経科学におけるリーダー的存在にある研究者で、情動と身体メカニズムに関する、影響力の大きな多数の論文を執筆している。本講演では、情動と自律神経活動の関連性に焦点を当てた機能的 MRI や PET を用いた機能画像研究について、これまで得られた成果を中心にわかりやすくお話しいただいた。

近年、情動の認知神経科学研究は極めて盛んに行われており、年間に 200 本を超える神経科学的アプローチによる研究が発表さ

れている。Critchley 教授の研究では、脳の活動状態に加え、心拍・血圧・発汗といった自律神経活動にも視点が向けられており、情動がいかに身体の反応に基づいているかを数々の優れた研究によって示している。本講演では、基本感情・恐怖条件づけ・心拍認識・内受容感覚・自律神経制御とバイオフィードバックなどのトピックに関する研究が紹介された。なかでも、心拍認識と帯状回前部および島皮質の活動との関係、および純粋自律神経不全症などの自律神経疾患を対象とした研究は、この研究領域において重要な位置づけを担っており、多くの論文において引用されるものとなっている。本講演は、聴衆にとって、歴史的な視点を踏まえながら関連研究を概観するよい機会となった。講演後も、多くの聴衆からさまざまな質問や意見が示され、活発な議論がなされた。(梅田 聡)

### 言語 / 英語教育講演会+対談「言語リテラシー教育のポリティクス」(2008年12月21日開催)

2008年12月21日(日)、慶應義塾大学日吉キャンパス第四校舎 J14 番教室において、言語 / 英語教育講演会+対談「言語リテラシー教育のポリティクス」をグローバル COE と三田教育学会の共催、慶應義塾大学出版会後援で開催しました。会場がほぼ満員となる 300 名近くの参加者を得て、大盛会となりました。当初、閉会 16 時を予定していましたが、参加者も加わった熱い議論が続いた結果、最終的に 17 時に終了いたしました。

第一部では、東京大学の佐藤さんのご講演「英語リテラシーのポリティクス」を拝聴しました。日本の英語教育の問題点、そしてこれからの日本の英語教育が向かうべき方向について、示唆に富んだお話しでした。

佐藤さんの主張は

- 1 英語教育では、「言語リテラシー」教育として、(母語に加えて) もう一つの言語世界を学習者の中に築くことが重要である。
- 2 その意味で、英語教育は、「言語リテラシー」教育として、国語と一つの教科「言語」に統合する可能性を模索すべきである。

とまとめられます。くわしくは、<http://www.otsu.icl.keio.ac.jp/>

に当日佐藤さんが使われたスライドのファイルを掲載してありますので、ご覧ください。

第二部は、佐藤さんとわたくしの対談という形をとり、言語教育に関する佐藤さんのお考えをさらに深く知ることができました。2人の考えは、母語教育としての国語教育と外国語教育としての英語教育は言語教育として統合されるべきだという点で共通しており、そこを出発点に生産的な議論が展開できました。

第三部では、登壇者の2人と会場にいる方々との間で討論が活発に行われました。

小学校英語問題、高校英語での「授業は英語で」問題など、混迷を極める日本の英語教育に対して一石を投じる貴重な機会になったと自負しています。なお、この講演会+対談と 2008 年 9 月 15 日に行われた英語教育シンポジウム(既報)の成果をまとめた単行本を準備中です。本年、慶應義塾大学出版会からの 6 月頃の出版を目指して現在編集作業を行っています。

今後も、英語教育、言語教育関連のシンポジウムやワークショップを開催していく予定です。みなさんの積極的な参加を希望します。(大津由紀雄)

## 合同シンポジウム「心・病・文化—医療をめぐる文化と倫理」(1月11日開催)

平成20年度・京都大学・慶應義塾大学 COE 合同シンポジウム「心・病・文化—医療をめぐる文化と倫理」が本年1月11日(日曜/12:30-16:30)に京都大学百周年時計台記念館二階国際交流ホールIに於いて開催された。京大矢野智司教育学研究科長の挨拶および京大側拠点リーダー子安増生教授の挨拶と開催趣旨説明、京大と慶大に通底する研究文化について慶大側渡辺茂拠点リーダーが発言、京大側杉本均教授の司会進行により以下のシンポジウムを行った後、同館一階ラ・トゥールで事後検討交流会がもたれた。シンポジウムでは、北米を代表する医療人類学者である Margaret Lock カナダ・McGill 大学教授が基調講演“The Potential Transformations of Self and Society through Biomedical Technologies: A Perspective from Medical Anthropology (生命医学テクノロジー進展に伴って生じうる自己変容、社会の変転について: 医療人類学の視座から)”を行った。北米の臓器移植レシピエントや遺伝子診断を自分の意志でうけた親の調査事例などを引き、生物医学の先進技術の導入により、患者や家族の自己像や出産観等の価値観が変容をしつつある点、制度と社会的過程がそれに伴って揺れ動いて変化し、全体として統一の実感に基づく価値観で医療行為を自己決定していくのが難しくなる状況が進行している点、出産を受け持つ女性にとって新たな負担が生じるなど、先端医療の社会的様相に問題点が多々見られる点、それらの実態を社会的局面の分析重視の医療人類学と比較社会的に批判的に捉える意義が指摘された。杉本教授の司会・日本語訳提示をはさみ〔翻訳・北中淳子准教授担当〕、京大・こころの未来研究センターのカール・ベッカー教授(宗教学・生命倫理)が応答講演“What should Japanese Medicine Learn from Medical Anthropology? (日本の医療は医療人類学から何を学ぶべきか?)”を行った。その内容は、臓器移植とiPS細胞研究の孕む問題点を中心に、日本での末期医療の患者への臨床的面談、

マサチューセッツ総合病院での赤子延命の多額な医療費を伴う事例や自願望学生への相談等の経験、梅原猛先生等との現代医療批判検討会の経験をふまえ、臓器移植資源が限られている状況で配分を政治家主導の立法や経済的負担能力だけの決定要因にまかせている現状と、基底文化をふまえた新たな社会的コンセンサス形成の必要性、米国で先端医療を研修して日本帰国後それを適用するだけに終始する日本の医師・医療の現状への批判が示された。続いて、京大・鈴木晶子教授(教育哲学)がロック先生へのコメントとして、京大派の系譜に連なる論点がロック先生の講演に深く現れている点、先端科学医療が進むのはよいとしても、直観や身体感覚を信頼して生きる幸福の視点が欠落しがちな現代医療の問題点を指摘した。さらに宮坂敬造は「医療人類学と生命倫理: その相補的關係」と題し、主にベッカー先生への討議として、リスク社会における倫理裁判官的な存在の両義性、文化社会の内部の多様性への着目、文化自体がグローバリゼーションで交錯再帰ネットワーク化するなかで Transcultural 位相をどこに位置づけるべきかについて論じ、ロック先生に代表されるマギル大学医療人類学の傑出した学際性は、各分野の具体的経験をぶつけて論争する開かれた姿勢から展開していることを指摘した。その後、会場質問も交えた質疑討論が活発に行われた〔通訳・北中先生〕。京大側の実証学・臨床学・実践学が結びついた「心が活きる教育」の先端的な研究と慶大側の「論理と感性」の先端的な教育研究の共通項としては、過剰な近代科学偏重主義が人々の日常生活の親密圏に侵入して感性のバランスが崩れている点、それに伴って心の病が増大している現状への批判点があげられるが、この問題の深層の一端が鋭く浮かび上がる公開シンポジウムとなった。最後に、京大側の準備全般と入念なご配慮に改めて感謝の念を記したい。(宮坂敬造)

## 人文グローバル COE 3 施設キックオフシンポジウム (1月30日開催)

2009年1月30日「人文グローバル COE 3 施設キックオフシンポジウム」と題するシンポジウムを開催した。グローバル COE では2007年から2008年にかけて、3つの施設が新しく立ちあげられた。野外生態研究施設(つくば)、MRI 研究棟(綱町グラウンド)、マーモセット実験施設(信濃町リサーチパーク)である。グローバル COE 教員の梅田聡(MRI 施設)・山崎由美子(マーモセット飼育実験施設)・伊澤栄一(野外研究施設)が、各施設を紹介し、それぞれの施設と関連のある領域の第一人者の先生方をお招きし、最新の研究情勢について伺った。

機能的 MRI の基本原理である、BOLD の原理を確立された小川誠二先生(東北福祉大学)は、「fMRI によって、“形”認識部位の specificity の新たな側面をさぐる」と題する講演で、機能画像の新しい測定法である pair-wised stimulus paradigm についての提案と紹介と、研究成果を紹介された。覚醒霊長類を用いて、PET による「知・情・意」の機能局在マッピング法を確立された大林茂先生(独立行政法人 放射線医学総合研究所)は、「マーモセットは脳科学とトランスレーショナル研究に何をもたらすか——霊長類を用いた次世代ポジトロン CT 脳研究への新機軸——」と題する講演を行い、マーモセットをはじめとした霊長類の論理課題の研究や、パーキンソン病をはじめとした疾患の動物モデルの紹介をしていただいた。繁殖行動に関わる研究をはじめ

めとした、鳥類を対象とした研究をされている上田恵介先生(立教大学)は、「托卵鳥(たくらんちょう)研究の新しい展開——ヒナ段階におけるカッコウと仮親(かりおや)の軍拡競争——: 富士山とオーストラリアでの野外調査から」の中で、フィールドにおける産みつける側と産みつけられる側の軍拡競争の比較研究を紹介していただいた。

領域や対象こそ異なるものの、全体を通して活発な議論が展開され、終了後の懇親会においても、多くの聴衆が、活発な討論を講演者と交わっていた。各施設における、今後の研究の発展が期待される。(増田早哉子)



# 事務局だより

## 活動予定

### ● 慶應義塾大学 グローバル COE シンポジウム 「世界最高水準の教育研究拠点の構築と運用—— グローバル COE：若手研究者育成、国際戦略そして 持続的発展」

第一部 グローバル COE 拠点運営を語る

第二部 パネルディスカッション「若手研究者育成と国際戦略」

開催日：4月4日(土) 12:00～18:00

会場：三田キャンパス北館ホール

主催：慶應義塾大学研究支援センター本部

講演者：平成 19 年度採択 グローバル COE 3 拠点のリーダー

「論理と感性の先端的教育研究拠点形成」渡辺 茂  
(分野：人文科学)

「In vivo ヒト代謝システム生物学拠点」末松 誠  
(分野：生命科学)

「アクセス空間支援基盤技術の高度国際連携」大西公平  
(分野：情報、電気、電子)

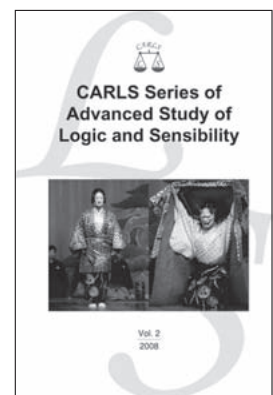
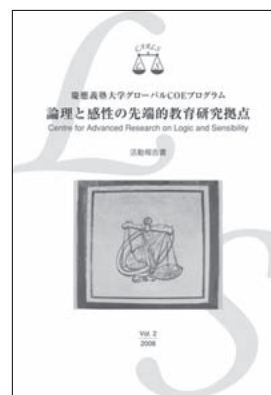
参加方法等の詳細については、慶應義塾ウェブサイト (<http://www.keio.ac.jp/>) にて御確認ください。

## 新刊本紹介

### ● 2008 年度成果報告書・活動報告書

2008 年度における本拠点の研究成果をまとめた報告書 2 冊を紹介します。CARLS Series of Advanced Study of Logic and Sensibility, Vol.2 (右) は、事業推進担当者や特別研究教員、研究協力者らの今年度の研究成果をまとめた論文集(欧文)です。

『論理と感性の先端的教育研究拠点活動報告書 Vol.2』(左) は、今年度開催したシンポジウム、研究会等の報告と拠点メンバーの著書、論文、学会発表等の業績をまとめたものです。入手方法につきましては、次頁事務局までお問合せ下さい。

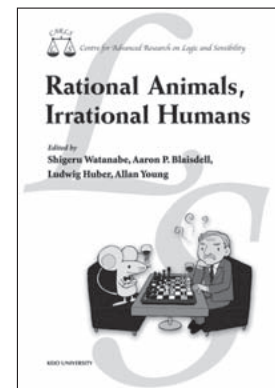


### ● Rational Animals, Irrational Humans

(Eds) S. Watanabe, A. P. Blaisdel, L. Huber and A. Young

この本は昨年行われた国際シンポジウムに基づくものである。Blaisdel らによる序言に次いで第一部は理論篇で Huber, Penn and Povinelli, Lestel, Young がそれぞれの立場から論理について論じている。2部は合理的選択の問題で、Castro, Wasserman and Matute, Rosati and Stevens, Adam and Freidin および Watanabe が動物やヒトでどのような場合に合理的(非合理的)な判断を行うかを述べている。3部は因果性で、Blaisdel, Seed and Call, Dan and Hiraki, Fujita and Ushitani が動物や幼児での因果性理解を扱っている。4部は洞察と推論で、Schloegl, Bugnyar and Aust, Bourgeois-Gironde and Van der Henst, Suzuki, Yamazaki, Ogawa and Iriki が動物実験から神経活動までの新しい知見を述べている。最後の5部は社会認知に関するもので、von Bayern and Emery, Teufel, Alexis, Davis and Clayton, Mimura が鳥類からヒトの神経心理学までを扱っている。

これほど国際レベルの第一線の研究者を集めた本の出版が我が国でなされるのは希有的なことだと思う。



### ● A New Approach to Functional Neuroimaging: Near-Infrared Spectroscopy (NIRS)

Y. Minagawa-Kawai, N. Naoi, S. Kojima

21 世紀 COE プログラムからグローバル COE の現在まで NIRS を用いたヒト成人、乳幼児の脳機能研究は本拠点の中核ともいえる様々な成果をあげてきた。本編は中でも小嶋教授を中心とするグループによる NIRS 研究の成果をまとめ、小嶋教授退任記念として刊行されるものである。NIRS の原理、実験手法、分析の基本概念を紹介する(1章)、成人(2章)や乳幼児(3章)を対象とした様々な脳機能計測実験を紹介する3つの章から構成されている。



## 研究員紹介

### 串田裕彦

11月より論理情報班の非常勤研究員となりました。私はこれまで、様相を伴った論理推論を理論的に研究してきました。具体的には、ハイブリッド論理、線形論理、証明の論理などの様相推論体系の中で、様相記号がいかなる論理的振舞いを示すかを理論的に明らかにしてきました。可能世界、資源、証明といった概念を直接表現する様相記号がいかなる場合に構成的な振舞いまたは

非構成的な振舞いをとるかといった問題に意味論的また証明論的に取り組んできました。また、哲学者プラトンが彼の自然哲学形成において、論理的推論の果たした役割についても具体的に指摘してきました。今回の研究では、線形論理のある一般化された様相概念の基本的性質について意味論的に明らかにしようとしています。どうぞよろしく申し上げます。

### 秋葉剛史

2008年11月から人文グローバルCOE非常勤研究員となりました秋葉と申します。学籍上の所属としては、哲学・倫理学専攻で後期博士課程に在籍しています。私の研究は、大まかに言って二つの側面を持っています。一つは、19世紀末から20世紀初頭にかけてドイツ語圏で活躍した哲学者たち（具体的にはブレンターノ、フッサールなど初期現象学の伝統に数えられる人々）の思想のうち、特に一般的存在論に関わる部分に焦点を当て、彼

らに取り組んだ「意識体験の構造分析」などの具体的な課題において、その一般的考察がどのように活かされているかを明らかにしようというものです。またもう一つの側面は、これと関連するのですが、近年英米圏の哲学で盛り上がりを見せている分析形而上学と呼ばれる伝統のうちで、フッサールらの着想がいかに受け継がれているかを考察すると共に、それらをもとにした新たな理論的選択肢の可能性を探ろうとするものです。

### 石田京子

2008年12月より、グローバルCOE非常勤研究員として着任いたしました、石田京子と申します。現在はずべての人間のもつ普遍的な義務と権利の根拠づけの解明を目的に、18世紀ドイツの哲学者イマヌエル・カントの法理論の研究をおこなっております。近年、『永遠平和論』（1795）の新訳が相次いで出版されたことから明らかなように、グローバル化の時代において、世界市民主義を標榜するカントの法哲学は、カント研究内部からの

みならず、日本の社会においても広く注目を集めている分野であるといえます。また、カントの理論は、ロールズやハーバーマス、ヌスバウムをはじめ、多くの現代の政治哲学者達に対して、多かれ少なかれ影響を与えています。そのことは、カントの哲学が、誰もが受け入れることができる社会や政治体制のありようを考える際の装置として、今なお魅力的な枠組みであることを示していると思われま

### 佐々木尚

みなさまこんにちは。私は2008年11月より慶應義塾大学人文グローバルCOEの非常勤研究員となりました佐々木尚と申します。

私の研究領域は作動記憶 (working memory) という認知システムです。この作動記憶は短期的な情報の保持と比較的高次の認知課題の遂行に関わるとされており、この研究領域には様々なものがありますが、私が今まで特に取り組んできたのは、長期

記憶の処理における作動記憶の役割と、学習過程における作動記憶の役割の変化です。また、本グローバルCOEではこの作動記憶研究を高次認知の研究に発展させて、論理的思考における作動記憶の役割や、流動性・結晶性性能と作動記憶との関係について検討していきたいと思っております。また、文章理解や学習方略の選択に対する作動記憶の役割なども検討していきたいです。

それではよろしく願いいたします。

**編集後記** 皆様のご協力により、年度内に本ニュースレターを発行することができました。年度末のお忙しい中、原稿を執筆頂いた方々には、なにより深く感謝をいたしております。

本人文グローバルCOEも採択後、早くも2年目に入ろうとしています。年度末に行われました3施設シンポジウムや若手成果報告会における発表の様子から、各施設、各研究班において、成果を出していくための研究、環境基盤がしっかりと整い、成果の蓄積や更なる研究の進展の段階に入りつつあることを感じております。まもなく次年度を迎え、また新しいメンバーが本プロジェクトに加わっていく事と思っております。それらの新しい力を加え、中間評価に向け、更に研究にはずみがついていけばと思っております。(菅佐原 洋)

慶應義塾大学 論理と感性の先端的教育研究拠点  
Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility  
Newsletter 2009, March, No. 7

発行日 2009年3月30日

代表者 渡辺 茂

〒108-0073 東京都港区三田 3-1-7 三田東宝ビル 7F・8F

TEL : 03-5427-1156

FAX : 03-5427-1209

keiocarls@info.keio.ac.jp

http://www.carls.keio.ac.jp/